

# 大村はまの教育実践

— 言葉の力と生きる力を育てる —

村 上 佳寿子

## はじめに

教育の質の重要性が見直されつつある。多くの分野において、これまでの教育の見直しが求められている。欧米諸国に学び、効率を求め、数字に表れる結果に執着し、たどり着いた先が今の世の中であるとすれば、教育の現場にも空洞化が存在すると言わざるをえない。上下、優劣、勝ち負けだけで評価する昨今の風潮は、ふたたびほんとうの教育と、教師の力の重要性を問いかけているように思えてならない。

本稿では短期大学において、学生に必要な教育を施し、一社会人として今後の人生を生き抜いていくために何をしていくべきかを手がかりに、国語教育者、大村はまの膨大な教育の実践のひとつこまを振り返り、短期大学の教育現場に生かす方法を探っていく。

## 1. 短期大学における教師の役割

短期大学における教師の仕事は想像以上に多い。項目を挙げていくと切りがないが、大きく分けると2つ、研究と教育である。研究に関しては、

教師が研究課題の研鑽を重ね、論文を執筆し、学会で発表することである。もう一方は、理解しやすい授業をすること、教室に良い雰囲気をかもし出し学ぶことに集中できるように導いていくこと、社会に出て通用する人としての基本を教えることを担う、広い意味での教育者の役割である。この2つの側面を充実させることによって、最終的には深い意味での学ぶ喜びを学生たちに与え、社会に出て活躍の場を与えられる人を育てていくことが理想ではないだろうか。

短期大学における教育を論じるにあたり、本学における教育の基本方針が、「広く、深い知識と教養を受け、实际的に役立つ能力を育てることにある。」を記しておく。この基本方針が目指すところは、教育理念として、知性・情操・意欲の調和のとれた豊かな人間性を養うことであり、これが本学における教育の原点である。

筆者が所属する本学英文学科では、上記の基本方針に沿って英語の能力を向上させるべく、多種多様な授業を展開している。英文学の授業と、実践的な英語の授業の二本立てである。英語の授業と言っても、文学作品を読んでその意味や文化を学ぶ授業と、英語資格試験をめざして問題演習をする授業では、科目は英語であっても、内容には大きな違いがある。どちらか一方だけを選ぶのではなく、両方をバランスよく学ぶことが可能なように、本学英文学科カリキュラムは作成されている。英語を習得する過程において、そのどちらも重要であるという考え方に基づいているからである。つまり、本学の教育基本方針に照らし合わせると、知識と教養にあたる英文学の授業と、实际的に役立つ能力にあたる、語学としての英語の授業であると言える。

短期大学の2年間でどのような教育を施し、どのような成果を期待するのかと言えば、第一に学生の英語能力を向上させること、第二は社会に出て生き抜いていける力を身に付けさせることである。英文学科で言えば、英文学と実用英語を学んで2年間で過ごし、その結果として各自が入学時

の英語能力をさらに向上させることが目標である。ひとつの目安として、英検（実用英語技能検定試験）の2級取得であり、TOEIC（Test of English for International Communication）の受験である。

第二の、社会に出て生き抜いていく力を養成するには、いくつかの基礎的能力を身につけることが大切である。まず、社会性である。全学的な行事やクラブ、サークル活動への参加を通して得られる体験により、学校に通って勉強しているだけでは得られない、人とのかかわり方を学ぶ機会を得ることができる。また、学校生活の中では、希望すればいつでも教員と話し合うことができる。教員が研究室に在室中はすべてオフィスアワーとして、学生がいつでも訪ねてこられるようにしている。

就職支援体制の充実、高い就職率の維持などから、本学は世間から就職に強いという評価を得ているようである。この評価を形成する一部をなしているのが、本学学生のあいさつとマナーではないかと推測する。言い換えれば、コミュニケーション能力とも考えられる。コミュニケーション能力の基本となる要素は、あいさつである。きちんとしたあいさつのできる学生が、本学には比較的多いのではないだろうか。そして、目上の人と接するときの話し方や態度などのマナーに対する意識も、1年生の後半から2年生にかけて急激に変化する。これは、就職ガイダンスにおける就職指導が徹底されている成果の一つと見ることができる。学生たちが、就職を強く意識した、望ましい変化と受け止めている。したがって、話し方やマナーについても在学中に身に付けていくと考えられる。

就職活動に際して、多くの学生たちが苦労しているのが履歴書の作成である。特に志望動機欄に、何をどのように書いていいのかわからないという質問が、就職活動の初期段階において多数を占める。ゼミの教員のみならず、就職支援室の先生方に相談するケースも多いことから、かなりの数の学生が苦労していることを伺い知ることができる。志望動機の内容もさることながら、考えていることを表現するための日本語の能力が不足し

ている場合が多い。日本語の語彙が乏しいことも一要因であり、書く技術が未熟であることによるものと考えられる。

ここまで、卒業して社会に出て行くまでに身に付けておきたい能力について論じてきた。それは、社会性、コミュニケーション能力、そして日本語能力である。社会人として生き抜いていくために必要なことは、つまり、周りの人とうまく関わっていく力であり、感じの良いあいさつやマナーを身に付けていることであり、はっきりと自己主張のできる日本語を書く力と話す力であると言える。そのような力をつけるために、教師は何をすべきだろうか。

## Ⅱ．教師の能力

教えない教師、教えられない教師がいる。教える技術を高めようと教える方を習う教師もいる。自分では教えていると思込んでいる教師もいる。自分自身も含めて、教えていると自分だけが思い込み、実際には教えていないという勘違い教師にならないように、襟を正していきたい。真摯に学び、真剣に教え、学生と向き合うことを最低条件としていきたい。

教師のあるべき姿を体現し、膨大な業績を遺した教育者に巡り会うことができた。平成17年4月17日に98歳でこの世を去った、国語教育者の大村はまである。大村の遺した数え切れないほどの教材と資料、研究発表、講演、著作、出版物のすべてに目を通すことは、並大抵のことではない。しかしながら、限られた時間にひもとくことができた著作を通じて、授業に向ける工夫と準備、教室での実践の記録に触れることができた。それは、大村が遺した膨大な業績からすれば、まるで浜辺の砂のほんのひとにぎりにすぎないかもしれない。しかし、ほんとうの教師をめざす人たちにとってはかけがえのない宝の山に見えるに違いない。ここでは大村はまの国語教育者としての長い歴史を振り返りながら、教師の仕事と職業意識についての考え方を明らかにしていく。大村が積み重ねた実践教育が生み出した

ものと、その意味を考えながら、現在の短期大学の教育現場で活かす方法を探っていく。

### Ⅲ. 大村はまの略歴

大村はまは明治39年（1906年）6月2日、横浜市中村町に父、益荒と、母、くらの次女として生まれた。共立女学校の教頭を勤めていた父と小樽北星女学校を卒業した母との間には6人子どもがいる。はまは4番目であり、上には2人の兄と姉、下に弟と妹がいる。

明治41年（1908年、2歳）に父が親戚の事業を助けるために一家で札幌に移住する。その後、父は札幌一中に勤務し、後に創立時の札幌二中に移って、漢文、歴史、英語を教える。父が横浜のYMCA（キリスト教青年会）の総主事となり横浜にもどるまでの4年間を札幌で過ごす。

大正2年（1913年、7歳）に横浜市立元街小学校に入学する。大正8年（1919年、13歳）に学校を卒業し、ミッションスクールである共立女学校に入学する。この頃から作文が好きになる。共立女学校では上級学校の受験資格を得ることができないため、ミッションスクールで「文部省指定」のある捜真女学校に、大正9年（1920年、14歳）に転校する。捜真女学校で、川島治子先生、溝上先生（後の画家、小倉遊亀）と出会い国語が好きになる。同時にその後の人生を決めるほどの大きな影響を受ける。

3年生になった大正10年（1921年、15歳）には4ヶ月ほどの療養生活を送る。この頃父親の収入が安定しておらず、家計が苦しくなり学業を続けることがむずかしくなる。しかし、宣教師の娘のピッケル先生が匿名で卒業まで学費を援助してくれた。援助に際しての条件は、将来、伝道か教育の道に進むことと、生涯の間にその道に進む貧しい生徒がいたら助けてあげてほしい、という2つであった。

大正12年（1923年、17歳）9月1日、関東大震災が起こり、家族は無事だったが、学友の半分を失う。大正13年（1924年、18歳）捜真女学校を卒

業し、東京女子大学に合格する。ところが経済上の理由から、同じ大学に在学中の姉の卒業を待って1年入学を延期する。当時父親が勤務していた文部省内のパーマー英語教授研究所で事務員として勤める。

大正14年（1925年、19歳）、東京女子大学に入学し、寮に入る。新渡戸稲造先生の考えにより建築された1人1室の寮室で、読書し自分自身をみつめ、意義ある充実した学生生活を送る。安井哲先生から実践理論の指導を受ける。芦田恵之助先生の『国語小読本』『綴方十二ヶ月』を読んで、国語教師になろうと決意する。

昭和3年（1928年、22歳）、東京女子大学を卒業。小学校専科（英語）正教員検定試験に合格する。国語兼英語教師として、長野県立諏訪高等女学校へ赴任する。後に文部省の検定試験を受験して合格し、昭和4年（1929年、23歳）から教諭となる。

昭和5年（1930年、24歳）、川島治子先生の紹介で、初めて芦田恵之助先生と会い、授業を見ていただいたり、授業をして見せていただいたりして交流を深める。昭和8年（1933年、27歳）頃から、国語の学習記録を始める。長野県立諏訪高等女学校で国語教育に打ち込んだ年月は10年間に及んだ。

昭和13年（1938年、32歳）東京府立第八高等女学校（現在の都立八潮高等学校）に転任する。以降、1日の欠勤もなく10年間勤める。昭和14年（1939年、33歳）から「図書館だより」を毎月1回発行し始める。課外読み物の良い本を選んで、「少女の書」として370冊あまりを発表する。戦争中も、困難をしのぎながら図書館から本を持ってきて貸し出しを続ける。

昭和19年（1944年、38歳）には千葉県我孫子に疎開し、昭和20年（1945年、39歳）に敗戦を経験する。新しい時代のために、20年の教職経験を生かして、捨てきりになって何かしたいと考える。

昭和22年（1947年、41歳）、新制中学校発足と同時に、希望して東京都江東区立深川第一中学校へ転任する。これが大きな転機となり、瓦礫の校

舎、机も椅子も黒板もない悪条件のもとで2組合併の100人あまりを講堂に入れて授業を始める。新聞を切り抜いてひとりにひとつずつの教材を作り、学習意欲の乏しい子どもたちを体当たりで指導し創造的な授業を展開していく。単元学習、主体的学習、グループ学習、個人差に応ずる指導などを次々と生み出し、実践指導を重ねていく。多くの著名な先生が授業を見学にみえる。この年、文部省の学習指導要領の委員となる。

昭和24年（1949年、43歳）、東京都目黒区立第八中学校に転任する。教員再教育講習会、東京都研究校、文部省協力校、その他、文化集会などで、多くの研究授業を行う。1日に2時間3時間の研究授業をこなしたり、2日間にわたる研究授業もこなす。

昭和27年（1952年、46歳）、東京都中央区立紅葉川中学校に転任する。文学鑑賞指導の研究校として、指導法をいろいろ試みた。単元「読書生活を豊かにする」の実践で「読書新聞」を3号作成する。

昭和31年（1956年、50歳）、東京都中央区立文海中学校に転任する。「どの教科書も読めるようにするために」というテーマで研究発表をする。その後の3年間、作文指導に精力的に取り組む。広島県大下学園「国語教室の実際」について講演をする（以後、亡くなるまで講演会を続ける）。

昭和34年（1959年、53歳）、中学校の作文指導について研究発表し、「作文の基礎力を養うための学習一覧表」を作る。そのひとつひとつのための教材を作り、まとめたものが、のちに『中学作文』（筑摩書房）として刊行される。倉沢栄吉先生のご指導で「書き出し文の研究」を発表する。

昭和35年（1960年、54歳）、東京都大田区立石川台中学校に転任する。作文指導の研究や実践、特に読書生活の指導に打ち込む。「生徒会誌」の編集に力を入れ、座談会の記事を組み作文を中心にした創造的な誌面や目次作りに取り組む。この年、東京都教育功労賞を受賞する。

昭和37年（1962年、56歳）、青梅市御岳、橋本館で開かれた「話しことばの会」の合宿研修会に参加する（この研究会は、国語教育学会に合併さ

れるまで続いた)。昭和38年(1963年、57歳)には、広島大学のペスタロッ  
チ賞を受賞する。

昭和39年(1964年、58歳)には、グループ文集や個人文集、学年文集な  
ど、いろいろな文集を作らせながら、文集のあり方、使い方を研究する。  
また3学期から「国語教室通信」を週間で発行し、学習予定をあらかじめ  
知らせることで主体的で豊かな学習を実現した。

昭和40年(1965年、59歳)から41年(1966年)にかけて、ほぼ1ヶ月に  
1回、東京教育大学教授、倉沢栄吉先生と同大学の内地留学生を迎えて、  
作文指導や読書指導などさまざまな実践研究発表会を行う(月例研究会。  
退職時まで続ける)。これは文章読本として毎日中学生新聞に連載され、  
昭和43年(1968年)に『やさしい文章教室』(毎日新聞社・のち共文社)  
という本にまとめられる。また、毎日中学生新聞に「どう学ぶか」を連載  
し、昭和41年(1966年)に『やさしい国語教室』(共文社)という本にな  
る。この連載は6年間続き、以下1年分ずつ1冊にまとまる。この年  
(1965年)、東京都青年国語研究会の委員長に就任する。

昭和41年(1966年、60歳)、読書指導の時間を1ヶ月に2時間ないし3  
時間取り、年間で20数時間の「帯単位」として取り組む。読書生活を確立  
すること、読書技術を身につけさせることを指導する。「読書計画の記録」  
をつけ、「読書生活通信」を作る。本の紹介のしかたを百通り工夫しようと  
試みるなど、いろいろな研究会で読書指導の研究を発表する。

昭和44年(1969年、63歳)には『やさしい漢字教室』(毎日新聞社・の  
ち共文社)、45年(1970年、64歳)には『ことばの勉強会』(毎日新聞社の  
ち共文社)と『国語教室の実際』(共文社)、46年(1971年、65歳)には  
『みんなの国語研究会』(毎日新聞社のち共文社)が刊行される。

昭和47年(1972年、66歳)11月、第1回国語科実践研究会を催し、現場  
の実践者による実践的提案の場をつくる。以後毎年開催し、生きていく力  
のひとつとしての読むことを身につけた読書人を目指して進めている単位



学習や、古典の指導、創作の指導の試みの研究発表を行う。

昭和48年（1973年、67歳）には『教えるということ』（共文社のち筑摩書房学芸文庫）、『さんせいどう漢字えほん百科』（全5巻、三省堂）を監修し、刊行される。

昭和51年（1976年、70歳）4月にはNHKテレビで「教える」が放映される。漫画『クリちゃん』を使った単元「いきいき話す」と、『子ども日本風土記』を使った単元「本を知る窓」の2つの授業であった。この番組は、1年半あまりかけて作られたもので、視聴者からの反響は大きく、再放送もされた（一部は、放送大学の教材にもなっている）。

昭和52年（1977年、71歳）には『読書生活指導の実際』『続やさしい国語教室』（共文社）が発行される。53年（1978年、72歳）には『学習慣用語句辞典』（三省堂）と『国語教室おりおりの話』（共文社）が刊行される。

昭和55年（1980年、74歳）3月に、20年間勤めた石川台中学校を退職する。この年は5月の退職記念の会で「私の単元学習の歩み」を講演したほか、精力的に講演活動に取り組む。また、NHKテレビ「私の自叙伝」NHKラジオ「ラジオ国語教室」などが放送される。秋には、第10回国語科実践研究発表会を「大村はま国語教室の会」研究発表大会で行う。以後、平成12年（2000年）まで毎年、研究発表を行う。

昭和56年（1981年、75歳）、『大村はまの国語教室』（小学館）の第1巻「ことばを豊かに」が刊行される。昭和57年（1982年）には勲五等瑞宝章を受章する。NHK「訪問インタビュー・教師でありつづける」が放映される。これまでの仕事を体系化した『大村はま国語教室』（全15巻・別巻1・筑摩書房）の第1巻が刊行される。以後、昭和60年（1985年）まで執筆に打ち込む。

昭和58年（1983年、77歳）、NHK海外向けラジオ「海外の皆様、ごきげんいかがですか」が放送される。『大村はまの国語教室』（小学館）第2巻「さまざまのくふう」が刊行される。昭和59年（1984年、78歳）、『大村は

まの国語教室』（小学館）第3巻「学ぶということ」が刊行される。昭和60年（1985年、79歳）、『教室をいきいきと』（1～3）（筑摩書房）が刊行される。昭和61年（1986年、80歳）、『教えながら教えられながら』（共文社）が刊行される。昭和62年（1987年、81歳）、『授業を創る』（国土社）が刊行される。昭和63年（1989年、82歳）、『教室に魅力を』（国土社）が刊行される。これは、全国大学国語教育学会大分大会と全国国語教育協議会での講演をまとめたものである。

平成1年（1989年、83歳）、『大村はま授業の展開 1 世界を結ぶ』（筑摩書房）が刊行される。平成2年（1990年、84歳）『大村はま・教室で学ぶ』（小学館）が刊行される。平成3年（1991年、85歳）には広島県、山形県、秋田県で講演をする。平成4年（1992年、86歳）には広島県、秋田県、山形県、山梨県で講演をする。平成5年（1993年、87歳）には広島県、山形県、福岡県で講演をする。平成6年（1994年、88歳）、『新編 教室をいきいきと1・2』（ちくま文庫）『新編 教えるということ』（ちくま文庫）が刊行される。平成7年（1995年、89歳）、『日本の教師に伝えたいこと』（筑摩書房）が刊行される。平成8年（1996年、90歳）、ビデオ『大村はま創造の世界』（大空社）が発売される。平成9年（1997年、91歳）、『三省堂例解漢字辞典』（林四郎氏と共著・三省堂）が刊行される。平成10年（1998年、92歳）『私が歩いた道』（筑摩書房）が刊行される。平成11年（1999年、93歳）、『心のパン屋さん』（筑摩書房）が刊行される。平成12年（2000年、94歳）には広島県、山形県で講演をする。平成13年（2001年、95歳）には、雑誌「中学教育」4～8月号に連載された野地潤家・広島大学名誉教授による「聞き書き ニッポンの教師たち」に登場する。雑誌「サライ」12月20日号の「サライ・インタビュー」に登場する。

平成14年（2002年、96歳）、『大村はまの日本語教室 日本語を育てる』（風濤社）、『大村はまの日本語教室 日本語を鍛える』が刊行される。平成15年（2003年、97歳）、『大村はまの日本語教室 日本語を味わう』（風

濤社)、『教えること復権』(ちくま新書)が刊行される。NHKラジオ第一放送「ラジオタ刊」に出演して、教えることの真髄を語る。

平成16年(2004年、98歳)11月、軽い感染症のため半月ほど入院する。平成17年3月に目黒区立第八中学校で中学生のために講演をする。4月12日には、NHK日本語センターのシンポジウムのための録画撮りをする。平成17年4月17日、横浜市緑区の新緑総合病院で、98歳と10ヶ月半の生涯を終える。

(以上、「教師 大村はま96歳の仕事」から抜粋)

#### IV. 教師としてのあり方

教師のあり方を論じる文章を、大村は多数書き遺している。ここではその代表的な文献をひもといていきたい。1995年発行の『日本の教師に伝えたいこと』の「学力をつける教師」には次のような一節がある。「生徒が好きで、愛情と熱意があります。」という言葉は、新卒の若い教師の話としてよく耳にするが、この3つは人間としてみなが持っていることであり、ごくあたりまえのことである。いい人であるということはあたりまえであり、いい人だけでは教師としての職業はつとまらない。ゆえに、この「好きと愛情と熱意」の3つだけでは、特に教師という専門職の資格とは言えないと主張している。

では何をもって教師は専門職の職業人として成り立つのか。これに対して大村は、学力をつける人、学力を養う技術を持った人が教師であると主張している。学校は学力を養う専門の場であり、教師はそこを職場とする専門職である覚悟と責任を持つべきと結んでいる。

さらに教師の心理状態についても前述の著書で言及している。教師のどのような心理状態が、教えられる側、つまり生徒にとって勉強に打ち込める状態に導くか。あせらず、落ち着いて、ただひたすら学ぶ心の状態に、どうやって教師は導いていけるのか。

この問いかけに対して、「新鮮さと謙虚さだと思います。」と大村は答えている。新しい教材で、新しく考えた学習計画で、新しい単元の学習にのぞむときは、そうしようと心がけていなくても、自然に、教師の理想に近い気持ちになれると言う。新しいことに取り組む時の期待と、そして不安の中に謙虚な気持ちがやどると述べている。教師が慣れの心から離れて、新鮮で、共に学ぼうとする謙虚な気持ちで生徒に接するとき、教室にえもいわれぬ学びの空気がたちこめると記している。

「新編教えるということ」には、ほんものの教師について書かれた文章がある。要約すると、教師はいろいろなことをしっかりと生徒に習わせなければならないが、同時に教師に対して不平がでてこないようなしくみとか、そういうものが多かれ少なかれ教室にはあるので、それらを考えた上で、深く内省して自分で自分をたたくような非常に強い気持ちがないと教師として勤まらないと言っている。つまり、ほんとうに良い仕事をしているかどうか、厳しく自己規制ができる人、それが教師だと言っている(1996)。

さらに、あたりまえということについて、同書で大村は「優しくて親切」は「一生懸命」と同じことで、これも教師としてあたりまえのこととしている。教師になる人なら、誇りにもならないし、長所にもならないと言い、それはあたりまえに出勤したと同じことであるとしている。そうではなくて、教えることの専門家として、ほんとうの意味の学力、生きる力をつけないといけない、このような世の中を生き抜く力が、優劣に応じてそれぞれつかなければならないと主張している(1996年)。

教師の言葉使いについて、大村は「言いたくない言葉——私の禁句集」としていくつもの事例を挙げている。たとえば「何べん言ったらわかるんだ。」「やる気がないからだめなんだ。」「お前のためを思うから言っているんだ。」などである。例がいずれも男性言葉となっているのは教師の多くが男性であった時代背景もあり、児童や生徒に対して教師は上の立場であ

るという空気も感じられる。しかし、はっと気づかされる言葉ではないだろうか。何気なく、似たような物言いをするのがなかったか反省すべき点である。

特に「やればできるんだ、やらないからできないんだ。」という言葉に対して、大村は「やってもできないことがある悲しみ、それを忘れたくありません。真心をこめてやれば、何でもやれるというものではない。人生の先輩である教師は、やれない悲しみを胸に持って、子どもを励ましたいものです。やってもできないことが相当あるということを考えて、不始末、というか不成績を温かな目で見たいのです。」と主張する（1994）。

52年間の教師としての人生で、大村は非常に多くの魅力あふれる授業を展開したと記録されている。ここでそのごく一部を紹介する。グループ学習について、大村は次のように記している。「ひとりひとりをとらえる」の一節である。

教育というのは、ひとりひとりを育てることであって、グループを作ること  
も、クラスを編成することも、束にして指導することが目的のではなく、  
グループのなか、クラスのなかで育つ、ひとりひとりがあるからです。グループ  
のなか、クラスのなかでなければ育たないものがあるから、そうするので  
す。ひとりひとりを育てるということは、個人教授とは違います。たいへん  
違うのです。グループにしてこそ伸びる、ひとりひとりの力を養うことなの  
です（1995）。

大村は多種多様な授業を展開した。その際にグループに分けて学習することもあったが、常にひとりひとりを念頭において授業をしていたことが伺える。

また、話し合いの仕方の学習では、まず話す中身を持たせることが大切であるとして、分かりやすい、割り切りやすい話題を選んで、よく調べることから始めている。ここでもグループに分け、ひとりひとりに目を配りながら授業をすすめている。そして、実際の話し合いを行いながら、話し

合いの仕方を体得させていく。最終的には、適当な小カードに自分が発言する内容を話し言葉そのまま、一目で見やすいメモしておくことという具体的な方法にたどりつく。さらに、人に話しを譲ること、ひとりでしゃべり過ぎないということを習得させていく。「自分の話がもし長くなったら半分で切って、そして人に話しを譲るということを機会あるごとに教えるわけです。」と言っている(1995)。現在、中学校や高等学校ではディベートを取り入れている学校もあると聞いている。大村の話し合いの仕方の学習においては、ディベートの訓練にも通用する内容が、わかりやすく、かつ具体的に盛り込まれているのではないだろうか。

作文指導においても、「一生懸命書きなさい。」とか「毎日日記を書きなさい。」のような命令では、書けるようにするのは難しいと言っている。ではどうするかと言えば、言ってもやらない人にやらせることが職業人としての教師の技術であるからと、まず心書き表したいということを持たせる工夫をして、書くことが胸からあふれでそうな状況を作っていく。思わず書きたくるように、次から次へとテンポよく展開していく。

具体的には、ある話を読んで聞かせる。話の途中で次はどうなるのだろうと期待するような箇所ので区切って、その後の展開を想像させて、文章を書かせる。ひとつの話の中で2、3回区切りながら同じことをさせていくというものである。

## V. 国語教育の実践を短期大学に生かす

どのようにすれば魅力的な授業ができるかを常に考えている教師は多い。ひらめきや思いつきで新しいことを取り入れることもあれば、教授法の中から意識的に選んでやってみることもあるかもしれない。うまくいく場合もあれば、うまくいかない場合もある。良くも悪くも予想とは一致しないことが多い。経験からひとつ断言できることは、同じことを同じようにやっても、クラスによって、時と場合によって違うということである。同じ反

応は一度もない。つまり、あたりまえのことであるが教師も学生も生きている人間であるから、互いになんらかの影響を及ぼしあっているということである。教える側と、学ぶ側が作り上げるクラスだけが持つ魅力である。

筆者が思いつきでやっていたことのひとつが、今回研究した大村はまの実践に実例として掲載されてあることを知った。ここで簡単に紹介する。平成17年度から7年ぶりに英作文（科目名はWriting I, II）を担当することになり、どのように進めるかを考えている時にひらめいたことである。中級レベルの英文学科1年生に英語を書くことを教えるにあたって、大きな目標を2つ立てた。授業で習う英語を実際に使えるようになることと、最終的に英語を書くのが楽しくなること、少なくとも英語を書くことが「苦になる」状態から開放されることである。

方法として教科書とは別にBlue Bookを持たせた。Blue Bookとはアメリカの大学の試験で使う答案用紙用の小冊子である。A4版の薄いノート形式で、表紙が青色をしていることからその名で呼ばれるようになった。これはアメリカの大学の試験だけではなく、ジャーナル(journal)という、日記、日誌形式で書く宿題用にも使われているので、そうした用途で使った。テーマを与えて、自由に英作文を書いて1週おきに提出させた。書く時の量的目安は1ページで15行以上とした。1回分で150単語程度の分量である。前期、後期6回ずつで、あわせて12回行った。このBlue Bookのチェックに際して、決めた事がひとつだけあった。文章、文法などの間違いをうるさく指摘しないということである。当初学生たちは驚いていたが、英語で書くことを練習するのだからあまり気にせず、とにかく書くことを徹底した。その代わり、書いた内容についてはできるだけ細かくコメントを書いて戻した。私ならこんな風にかくという英文を必要とところに書きこむこともあった。重大な間違いの場合には指摘することもあったが、ごくわずかであった。ほとんどの場合間違い探しをせずに前期6回を通した。ただし、全体的な講評として目に付いた勘違いや間違いをBlue Book

返却時に授業で説明した。その結果、3回目頃から目に見えて間違いが少なくなった。学生の書いた英文の間違いを指摘していないのだから、不思議といえば不思議であった。しかし、英文の内容についてのコメントは学生の書きたい気持ち、伝えたい気持ちを刺激したのかもしれない。ほとんどの学生の書く分量が増えた。15行以上という下限だけで上限は設けていなかったため、1ページの裏表にさらにもう1枚を付け加えて書いてきた学生もいたほどである。

後期のテーマは前期と比べて難しいものを選んで与えた。考えなければ書けないようなことや、自分の意見を持たないと書けないことである。時には映画の一部や、テレビコマーシャルを見せて、それについて書かせることもあった。内心、学生は書くことができるのだろうかと不安であったが、取り越し苦労に終わった。前期にも増してよく書いてきた。全体として、文法的な間違いが少なくなり、書く内容は豊富になり、書く分量も増した。

大村の当時の作文指導の実物コピーを見ると、生徒が書きあぐねている部分を大村自身の文章で書いて見せている。「それを繰り返し読んでいるうちに、何となく自分がそう書いていたような錯覚が起こってきて、とにかく、ほめられたとか、直されたとかということではなくて、しばらく心をこまやかにしていることができるでしょう。よい文章の書けるときのような心の状態にしばらくなっているでしょう。こまやかな文章の書けるような、頭の働かせかたというか、練り方というか、ひとつの頭の訓練のようなことができるのではないのでしょうか。」と話している（2004）。

前述のBlue Bookについては、英語のWritingの授業であるから、どこまでこまやかにできたかは定かではない。しかし、こう書けば通じるという英語の書き方を見ることができて、ヒントになっていたのかもしれない。間違いを指摘しないことで、書くことに集中できたのではないだろうか。やはり、書くことは書くことによってしか、学べないということを再確認した。



次に、大村の実践をそっくりそのまま英語で試みた授業を報告する。前述の大村の実践、「ある話を読んで何箇所が区切って、その都度書かせること」を、そのまま英語のWritingで試みた。英語に訳して読むか、日本語のままかと迷いはあったが、話は日本語のまま読んだ。書く時はもちろん英語にした。3箇所区切ったので、3種類のことについての英文を書くことができた。これを下書きとして自由にBlue Bookに書かせた。結果は上々であったと言える。学生それぞれの目の付け所が違い、予想とは違った反応も現れて、たいへん興味深い内容の英文が書かれていた。書く側の学生の反応としては、どうまとめてよいか悩んだというコメントもあったし、やり方がよくわからないという質問もあった。

しかし、この大村の実践の例は、英語の書き方においても十分機能することが今回の経験でよくわかった。今後の修正として、学生がより興味を持ちそうな話を選ぶことと、英語で書かれた話を英語で読むことも必要であると考え、日を新たに再度試みる計画である。

ここまで、大村の授業における実践の一部を紹介し、児童、生徒に対して行ってきた魅力ある授業の一端を振り返った。すべて国語を教えることの実践であるが、英語を教える際にも十分生かすことができると考える。対象は学生であるが、内容を吟味して導入のしかた、指示の仕方を工夫すれば、短期大学においても効果は期待できると考える。

他にも、基礎ゼミナール（全学科1年生対象、全専任教員が1ゼミずつを担当。前期は日本語の書き方を後期は日本語での発表の仕方を学ぶ）において、取り入れることが可能な実践の例がいくつかあった。ここで代表的な例をひとつ紹介する。

単元学習について本稿では詳しく言及しないが、大村はまを語る際には、はずすことのできない実践教育の代表的なものである。単元学習では、あるテーマを与えて、調べながら学習していく。その際に社会科学になってしまおうというという声に対する応えとして発表したのが、次にある「目標」

である。以下に全文を紹介する。

## 目 標

1. 自分の聞く力、話す力を十分に使いながら、聞く力、話す力の働きの大きさを実感すること。
  2. ひとの音声による表現によってこそ伝わってくる息づかいのなかに、意味・意図、また、その人を感じとること。
  3. 話を聞きながら、いきいきと考えつづけること。整理したり、まとめたり、発見したり、疑ったりする習慣をつけること。
  4. 聞きやすい話の特徴について、内容と表現の面から学習を深めること。
  5. 自分の音声を聞きながら話す習慣を身につけること。
  6. 場を読み、聞き手を読み、話の内容とその構成、話し出し、テンポを短時間に整えること。
  7. 自分の話しことばについて、いろいろの場、いろいろな目的、いろいろな相手に応じ、実際について、欠点を確実にとらえる能力を持つこと。
  8. 対談とインタビュー、朗読すること、シンポジウムとパネル・ディスカッション等、いろいろの形を確かめ、それに応じた話し方をする。
  9. 知らなかった世界に触れ、語いを広げる。今までの生活のなかで、考えたり話したりしたことのない考え方、感じ方に出会い、受けとったものを表すことばを求め、探し、苦しみ、語いについて考える姿勢、態度をみがくこと。
- 意外な自然観、人生観、価値観に接し、ことばを探し求める経験を重ね、自分の語いの世界を広げること。(1995)

これはあるテーマのために大村が考えた国語科としての「目標」である。

具体的なテーマそのものは一度も言葉として出てこない。しかしそのテーマを知ると、なるほどと納得する。テーマは「アイヌ民族」である。このような目標は大学生にふさわしいテーマを与え、調べる際に十分活用できるのではないだろうか。

次に、実際に大学で研究と教育に携わっている人の意見を聞いてみたい。「教えることの復権」で刈谷剛彦は言う。

大村の実践から見えてくるのは、学校は大人になるための練習の場だという考え方である。知識や情報を伝え、受けとることだけが学校の役目ではない。どのように伝え、受け取るのかという、学校での教え－学ぶ過程には、ほかの場ではできない「練習」の意味合いが含まれている。しかも、練習の仕方をコーチしてくれる専門家＝教師がついている（2003）。

また、刈谷は教室という場に居合わせることでしか共有できない、複雑な状況をうまく利用できれば相互的な授業が成り立つと主張し、教室は単なる情報伝達ではなく、やり方次第で、一斉授業や講義形式の授業にもあてはまると指摘している。

さらに、学校でなら失敗が許される。というよりも、学習の失敗をあらかじめ組み込んだ上で、教えることを成立させる場が学校なのだとしている。学校の特権、それは失敗をしつつ、わからないことをわからせる場、できなかったことをできるようにさせる場であるということをもどのように生かしていくかは教師次第としている。

教えることの復権を考える上で、教えなくなる教師を生み出す原因のひとつには、日本の学校のあり方や教育改革のやり方にも一因があると指摘しているが、一個人として、「明日もまた教室に立って教えたい」と思えるような魅力を、自分の仕事の中に作り出すこと。それが教えることの復権ではないかと主張する。

この項のまとめにかえて、刈谷の文章を引用する。

教え－学ぶ関係の中で、ともに作り出される知的な興奮が、私の場合「教えたい」という魅力である。学生たちがそれまで考えてみたこともない問いに頭をひねって考えている姿は、とてもチャーミングだ。ときには、学生の解答を手がかりに、授業中に私自身が思わず自分の考えに没頭してしまうこともある。大学だからできることかもしれない。ただ言いたいのは、教えるための準備をした上でやっと訪れてくる、そうした魅力的な時間に立ち会いたいという願いは、どの教師にもあるはずだし、それを大事にして欲しいということだ。真剣に教えようとするから、そこで知の刺激や興奮が起きる。それは、突然やってきたり、静かに訪れたりする。こういう喜びが教室で起こりうることは、小学校でも大学でも同じだろう。こちらが一方的でも、逆に学ぶ側におもねっても、こうした喜びの時間は訪れない。

## VI. 仕事の成果

大村は、教師の仕事の成果はなかなか見えにくいと言っている。自分で見ることができるのはほとんどないだろうし、本人が気づくことはもっとないだろう。ほんものであればあるほど気づかれないだろうが、教師の仕事はそういう物だと言っている。ここで忘れることのできない話を紹介する。大村が恩師である奥田正造先生から聞いたという話である。

ある時、仏様が道ばたに立っていらっしやると、一人の男が荷物をたくさん積んだ荷車を引いて通りかかった。男の荷車がぬかるみにはまった。汗びっしょりになって引くが動かない。それを見ていた仏様がちょっと指で車に触れられた。すると、車はすっとぬかるみから出て、男は元気に引いて去っていった。男は仏様に助けられたことを永遠に知らない。自分が努力して、抜け出したという自信と喜びを持って車を引いていったのだ。こういうのが本当の教師だ。(2004)

最後に、大村の著書「忘れえぬことば」(2005) から遺作となった詩を披露して、大村が求めた教育実践に思いを馳せ、この項を結びたい。教え

る側でも習う側でも、学ぶということはこういうことなのではないだろうか。この詩は亡くなる1週間前の4月10日に小学館に託されていたものである。

### 優劣のかなたに

優か劣か

そんなことが話題になる、

そんなすきまのない

つきつめた姿。

持てるものを

持たせられたものを

出し切り

生かし切っている、

そんな姿こそ。

優か劣か

自分はいわゆるできる子なのか

できない子なのか、

そんなことを

教師も子どもも

しばし忘れて、

学びひたり

教えひたっている、

そんな世界を

見つめてきた。

学びひたり

教えひたる、  
それは 優劣のかなた。  
ほんとうに 持っているもの  
授かっているものを出し切って、  
打ち込んで学ぶ。  
優劣を論じあい  
気にしあう世界ではない、  
優劣を忘れて  
ひたすらな心で ひたすらに励む。

今は できないできないを  
気にしすぎて、  
持っているものが  
出し切れていないのではないか。  
授かっているものが  
生かし切れていないのではないか。  
成績をつけなければ、  
合格者をきめなければ、  
それはそうだとしても、  
それだけの世界。  
教師も子どもも  
優劣のなかで  
あえいでいる。

学びひたり  
教えひたろう  
優劣のかなたで。

## おわりに

本稿では、短期大学における教師の役割、教師の能力、大村はまの略歴、教師としてのあり方、国語教育の実践を短期大学に生かす、仕事の成果について論じてきた。大村の著作や講演の記録を読めば読むほど、教師としての職務に向けた真摯な姿勢と、全身全霊で子どもたちに向き合った愛情あふれる教師の姿に畏敬の念を感じずにはおられない。学ぶ喜びと共に生きる喜びを与え、教え続けた教育者の姿である。

筆者が思いつきで試みた、授業における工夫のほとんどを、大村はすべて理論に基づいた実践によって、明らかにしていた。この研究を通じて、筆者が手探りで歩んできた道のはるか先を、力強く歩んでいた教育者の足跡の一端を確認することができたのは幸いである。

## 参考文献

- 大村はま（1994）.「新編教室をいきいきと1」 ちくま学芸文庫
- 大村はま（1995）.「日本の教師に伝えたいこと」 筑摩書房
- 大村はま（1996）.「新編教えるということ」 ちくま学芸文庫
- 大村はま（2003）.「教師大村はま96歳の仕事」 小学館
- 大村はま（2004）.「大村はま講演集・上 人と学力を育てるために」  
風濤社
- 大村はま（2004）.「灯し続けることば」小学館
- 大村はま（2005）.「忘れえぬことば」小学館
- 大村はま・刈谷剛彦・夏子（2003）.「教えることの復権」ちくま新書
- 大村はま国語教室の会（2005）.「大村はま先生ご逝去」『はまべ』第13号